

# 一九八〇年代初頭三峡ダム正常貯水位をめぐる議論と動き

林 秀 光

はじめに

第一節 最高指導層の動き

1 鄧小平の現地視察と「軽率に否定しない」発言

2 権力交替

① 李先念の権力の相対化

② 趙紫陽の登場とあいまいな意見

第二節 「三峡水利枢纽论证委员会」開催予定

1 国家科学委员会と国家建設委员会の主宰による開催

2 水利部長銭正英と長弁主任林一山による延期の提案と意

図

第三節 水利部門の「低壩」志向——治水から発電への傾斜

1 銭正英「二二八メートル案」の指示

2 長弁「低壩」模索の歴史

① 発電優先の「分期開発」案

(1) 六四年四月三日周恩来への提案

(2) 六六年三月九日「党中央と主席」への提案

(3) 六八年四月湖北省との連名で「毛主席、党中央、國務院、中央军委」への提案

(4) 七〇年一月一七日の周恩来への提案

② 李先念の「高壩中用」案への追隨

3 魏廷琿と王家柱による「二二八メートル案」の提案

第四節 水利部門の「高壩」への回帰

1 王任重の治水重視と「二〇〇メートル案」の強調

2 長弁の「二〇〇メートル案」報告

3 湖北省の報告と利益主張

おわりに

## はじめに

三峡ダムサイトの候補地が水利部党组によって一九七九年末に決定されたのを受けて、推進派にとって次の課題は、ダムの正常貯水位案をかためて最高指導層に三峡ダムを建設する決定を促すことであつた。<sup>(1)</sup>

じつは、三峡ダムの正常貯水位は五八年春に成都で開かれた中央政治局会議（以下、成都会議）において、「今後の基本建設または四川省の水没をできるだけ軽減することを考慮し、正常貯水位は呉淞起点以上二〇〇メートルを超えてはならない」と定められていた。<sup>(2)</sup> それ以降三峡ダムの正常貯水位を二〇〇メートル以下とすることがコンセンサスになっている。八〇年代に至っても国力と経済規模では、最初から二〇〇メートル案あるいはそれに近い案で建設するのは困難であつたこと、完成してもその発電量を消費しきれないという現実問題があつた。

一般的に、この二〇〇メートルに近い案を「高壩」案といい、一五〇メートル前後かそれ以下の案は「低壩」案と称される。貯水位を高めることには、下流の治水能力を高め発電量を増加させるメリットがある一方、ダム上流の水没範囲が拡大する、建設資金が増加するといったデメリットもある。したがって、正常貯水位の策定には、技術面のみならず、予算、上流と下流の地方政府間および水利、水力発電と交通を主管する中央政府部門間に存在する利害関係の調整も含めて検討しなければならない。そのなかでも、治水と水力発電、そして水運が正常貯水位の決定を左右するもつとも重要な要素であるため、それぞれ水利部門と湖北省、水力発電部門、交通部と重慶市が政策決定に大きな影響力を与える。

推進派のなかでも「高壩」と「低壩」をめぐる意見の相違があり、さまざまな思惑と絡みながらいくつもの正常貯水位案が模索された。また、この「低壩」と「高壩」の折衷案として、「分期開発」案や「高壩中用」案に代表される、あらかじめダム本体の高さと最終の正常貯水位を決めたうえで、工事を数段階に分けて徐々に正常

貯水位を引き上げていく手法も考案された。

三峡ダムの正常貯水位は紆余曲折をへて最終的に一七五メートルに決定されたが、じつは八四年四月に、國務院は水力発電のために一五〇メートル案を決定した。一五〇メートル案という洪水対策の役割が限られた案に、長江中下流の治水を唱えてきた水利部門が妥協していた。その背景には、水利部門とりわけ三峡ダムを立案する長弁は、三峡ダムの決定を最高指導層に促すために六〇年代から八〇年代までダムの建設に着手しやすいように、いろいろな正常貯水位案を模索してきたことがあると考えられる。

先行研究では、一五〇メートル案の決定にいたる正常貯水位をめぐる推進派と最高指導層の思惑と政策過程の紆余曲折について、詳細な分析がなされていない。<sup>(3)</sup>この時期に関する資料の乏しさに加え、「低壩」では水利部門が三峡ダム建設の意義として従来主張する治水機能を十分に果たせず、それを模索したこと自体が自己矛盾であると指摘されかねないため、自らの動きにあえて言及しない傾向が強いことも資料の欠乏に関係したと思われる。

本稿では、正常貯水位をめぐる推進派の議論と動きを通して、一五〇メートル案の決定に見られた三峡ダム史における治水から発電へのパラダイム転換の伏線を解明し、「断片化された権威主義」モデルでは捉えきれない中国の政策過程の特徴を考察する。<sup>(4)</sup>

## 第一節 最高指導層の動き

### 1 鄧小平の現地視察と「軽率に否定しない」発言

八〇年夏、鄧小平は夫人と孫を帯同して六月末から北京を離れて西安、成都、重慶、武漢、鄭州、北戴河と視

察を兼ねて周遊し、帰京したのは二か月後であった。

六月三〇日に、彼は専用列車で西安に向かい、兵馬俑博物館と碑林博物館を見学し、七月三日に成都に移動した。四川省では、峨眉山と都江堰を見学し、同月九日に飛行機を製造する四川峨眉機械廠、翌日には成都市双流県のある人民公社を視察した。そして、同月一日夜に重慶を出発し翌日の午前に三峡を下り、午後葛洲壩ダムを視察した。鄧小平は二日まで武漢に滞在したのち、丹江口ダムを視察して鄭州に移動し、翌日黄河花園口を視察するとその日の午後に北戴河に向かった。

三峡下りの船には、四川省長魯大東、湖北省委第一書記陳丕顯、交通部第一副部長彭德清、中共長江港運局委員會副書記張紹震、長弁副主任魏廷琿<sup>(5)</sup>も同乗していた。鄧小平はこの際に船上で魏廷琿から、また葛洲壩ダムの視察の際に葛洲壩工程局長廉榮祿から三峡ダム関連の報告を受けている。

この二日間に関わされた会話のメモが残されており、以下のことが読み取れる。<sup>(6)</sup>

第一に、鄧小平は「三峡ダム反対派の非常に重要な懸念」として、三峡ダムの建設がもたらす長江の水温の低下による下流の農業と漁業への影響について質問した。この時点での、三峡ダムによる「生態環境」への影響に関する関係者の問題意識はその程度であったことがわかる。

第二に、魏廷琿をはじめ湖北省党書記陳丕顯や葛洲壩三三〇工程局の廉榮祿は、鄧小平に対して三峡ダムのデメリットや葛洲壩ダムの抱える問題については報告せずに、三峡ダムを強くアピールした。<sup>(7)</sup>これに対し、鄧小平が魏廷琿に「あなたは三峡ダムをやりたいとの意見だが、彼（万県地委書記を指す）は賛成していない」とくぎを刺す一幕もあった。<sup>(8)</sup>

第三に、鄧小平は三峡ダムの発電機能および葛洲壩ダムに使用した機械設備の再利用に期待を寄せた。鄧小平は、三峡ダムの発電により莫大な収入が得られるとの報告を受けて、「利益が大きい。さらにしっかりと討論しな

ければならない」と発言している<sup>(9)</sup>。また、葛洲壩ダムの設備を三峡ダムの施工にも利用できることを聞かされて、鄧小平は「経費を相当節約できる」と喜んだ<sup>(10)</sup>。

そしてこれらのメモによれば、鄧小平はすでに水利部党组によって決定されたダムサイトについては言及したものの、三峡ダム建設の決定を左右するきわめて重要な要素であるダムの高さについては触れなかった。

また、武漢滞在中の七月一七日から二〇日の間に、胡耀邦、趙紫陽、姚依林が「六五」計画と長期計画について報告に来ていた。その際、鄧小平は「三峡ダムは水運や生態環境へはさほど影響を及ぼさず、高い治水能力と発電力があり、発電による収益も大きい。したがって、三峡ダムを軽率に否定するものではない」と発言した<sup>(11)</sup>。

この談話は、「三峡ダムにとつてきわめて重要なカギとなる転換点であった」と評価されている<sup>(12)</sup>。たしかに、この「軽率に否定するものではない」との発言は、従来最高指導層でくすぶっていた陳雲らの反対意見を牽制する効果があり、推進派にとつて好都合であったと思われる。しかし、後述するように、國務院がただちに鄧小平の指示に呼応したにもかかわらず、推進派は政策の推進に積極的ではなかった。また、この時点でも、鄧小平が三峡ダム正常貯水位の問題について触れなかったことにも注意を向ける必要がある<sup>(13)</sup>。

## 2 権力交替

### ① 李先念の権力の相対化

八〇年八月三〇日から翌月一〇日に開かれた第五期全人代第三回会議において、趙紫陽は華国鋒の後任として総理に昇任した。鄧小平、李先念、陳雲、王震、王任重も副総理を辞職したが、李先念にとつては二六年間務めた副総理の座を正式に離れることになった<sup>(14)</sup>。

こうした最高指導層における権力交替はなんらかの形で三峡ダムの政策過程に影響を与えたものと思われる。

というのも、七八年一月に葛洲壩ダムを視察した李先念と谷牧は、その堰き止めのセレモニーに再訪する意向を持っていたのだが、これは実現しなかった。<sup>(15)</sup> セレモニーは八一年一月に行われており、彼らが再び現地を訪れたのは、その数か月後の八月と一〇月である。

八月に葛洲壩ダムを再訪した谷牧副総理は、部下たちのさまざまな要求に対して、李先念とともに実権を握っていた七〇年代後半をふりかえり、「あのときはやりやすかった。私たち二人が決心すればなんでも決まった」と語った。彼は発言の最後に部下たちの要望を北京に持ち帰ることしかできないと詫びて<sup>(16)</sup>いる。

一方、国家副主席となった李先念は一〇月六日に葛洲壩ダムを再訪した。葛洲壩ダムとの深いかわりからか、彼は現場ではきわめてリラックスした様子であった。中央で葛洲壩ダムの浪費問題が批判にさらされたことについて愚痴をこぼしたり、大事業を成し遂げた社会主義体制の優越性を誇示するために、当時話題の『苦恋』の作者に葛洲壩ダムを見せるべきだと発言したりと、軽口を叩く様子が資料からうかがえる。

その一方で、入手が叶った資料では彼の発言は「長江中下流の洪水問題の解決には三峡ダムをやらなくてはならない」と強調するにとどまっており、具体的な指示が見当たらなかった。<sup>(17)</sup> 李先念と谷牧の言説からは、七〇年代末の状況とは異なり、彼らは政策を決定する権限がなくなったことがうかがえる。

## ② 趙紫陽の登場とあいまいな意見

じつは、葛洲壩ダムの堰き止めのセレモニーに参加したのは趙紫陽であった。堰き止めの二日前、八一年一月二日に葛洲壩ダム堰き止め報告会が現地で午後二時から六時半まで開かれ、八〇人あまりの出席者が参加し、魏廷琿を筆頭に五人が報告を行った。<sup>(18)</sup>

趙紫陽は報告者の発言に割り込むように意見を述べていた。魏廷琿の報告に対して、「長江三峡ダムの仕事は

停止してはならない。論証は継続して行い、実験も科学研究も継続して進めなければならない」と述べた。

また葛洲壩ダムの施工を担当した三三〇工程局の曹宏勲の発言を受けて、「あなたたちは鄧（小平）副主席を説得したではないか。武漢で鄧副主席が（三峡ダム）を造る必要がある、造らないといけなといった」と言葉（19）を挟んだ。これは、前述した鄧小平の武漢での発言を指していると思われる。

かと思うと、続く発言では、「あなたたちも（葛洲壩ダムは）三峡ダムの前哨戦、実戦準備であるといっている。三峡ダムについてはまだ論証する必要がある。必ず造らなければならないが、ただそれがいつになったらできるかはわからない」とあいまいなことを述べている（20）。

じつは、会議の冒頭に、趙紫陽は曾思玉（葛洲壩ダムを積極的に推進した武漢军区総司令官）の「三峡ダムをやるなら、私は二票を投じる。両手を上げる」という発言に言及し、「在席の同志もおそらく二票を投じるのが多数だろう」と述べており、会場の空気を読み取っていたものと思われる（21）。

そのなかで、「葛洲壩ダムが三峡ダムの『実戦準備』である」と断言せず、鄧小平の意向を伝え、建設の必要性も認めつつも政策決定についてはあいまいな姿勢を示す趙紫陽は、推進派の意見とは一線を画したといえよう。

趙紫陽の慎重な姿勢は、「長江治水の」問題解決を三峡ダムの建設に頼ることはできない。少なくとも一〇年間は頼れない」と八〇年に指示したことからもうかがえよう（22）。

八一年における最高指導層の動きとして、薄一波と王震も葛洲壩ダムを視察したことが挙げられる。一〇月二三日に副総理薄一波が視察した際、水利部副部長陳賡儀が「三峡ダムは一時熱心に論ぜられたが、異議があり現在では世の関心も冷めはじめている」と訴えた。それに対して、薄一波は「葛洲壩ダムを完成できたのだから、三峡ダムもきつと成功するだろう。ただいつやるかの問題だ」と発言し部下をなくさめた（23）。

翌月一六日に中央政治局委員王震も葛洲壩ダムを視察した（24）。彼は葛洲壩ダムの現況について事情聴取したが、

三峡ダムに関する具体的な言及は行っていない。じつはこの二人とも三峡ダムが決定されるまでかわるようになるが、とりわけ王震は三峡ダムの決定において重要な役割を果たした。

## 第二節 「三峡水利枢紐論証委員会」開催予定

### 1 国家科学委員会と国家建設委員会の主宰による開催

前述した鄧小平の武漢における七月の発言は、数日後の二二日に國務院会議において伝達された<sup>(25)</sup>。そして、翌月初めに、國務院が常務會議を開き三峡ダム問題について討議した。そこで、国家科学委員会（以下、科委会）、国家建設委員会（以下、建委会）が論証会を主宰し、水利、電力およびその他の分野の専門家を招集し、三峡ダムについて意見を出すことを決定した。その論証会の議題は「三峡ダムをやるかどうか、やるならいつやるか」とした<sup>(26)</sup>。

同月四日に、科委会の林漢雄と建委会の王京が能源委員会、水利部、電力工業部（以下、電力部）、長弁などの組織を招集し、「三峡水利枢紐論証委員会」開催の準備について討議した。一〇月四日に科委会の武衡と建委会の謝北一が主宰し、各部と委員会の責任者が出席する「三峡論証予備會議」が開かれた<sup>(27)</sup>。

この會議で決定した事項について、同月二五日に、科委会と建委会連名で（八〇）国科発二字七三一号文「關於召開三峡論証会的通知」が関連の組織に発出された<sup>(28)</sup>。

具体的には、次のことが通知された。

第一に、「會議準備小組」の成立を組織する。その構成員は、武衡、謝北一、金熙英、袁宝華、王林、何康、潘鴻、錢正英、李銳、陶琦、曹維康、林一山、叢子明などである。その下に弁公室を科委会に設置し、林漢雄と



王京が具体的な責任を持ち、科委会、建委会、水利部、電力部、交通部、第一機械工業部（以下、一機部）、長弁と農業委員会から人員を派遣すること。

第二に、会議の規模は参加者が二〇〇人前後で、長江流域のグラウンドデザインと三峡ダムに深い造詣と見識を持つ専門家と領導幹部を招聘する予定であり、異なる見解を持つ参加者の派遣を考慮すること。（中略）。会議の開催時期は暫定的に一二月下旬を予定する。

第三に、論証の核心となる問題は、三峡ダムをやるかどうか、やるならいつやるかである。また重点的に次の課題について論証を行う。①三峡ダム建設の経済効果と現れる可能性のある問題、②立ち退き問題、③水運問題、④生態環境問題、⑤長江中下流の洪水対策問題と三峡ダム建設の関係、⑥長江主流と支流の開発問題、⑦安全保障問題、⑧長江三峡および主流と支流の開発による水産養殖への影響、⑨大型発電機や電力系統のグラウンドデザインなどの重大な技術的な問題。

第四に、長弁、電力部、交通部、一機部、人民解放軍総参謀部、水産総局、四川省、湖北省が重点的に提出する資料の内容に関する明確な規定。

第五に、関連部門は各自専門家を組織して主管する問題について準備を進め、理由と根拠を備え科学的に論証された報告書を作成すること。

## 2 水利部長銭正英と長弁主任林一山による延期の提案と意図

じつは、長弁は一〇月に発出された「關於召開三峡論証会的通知」を受けて、一一月に「長江三峡水利板紐論証報告」を作成していた。<sup>(29)</sup>しかし、その後、「三峡論証準備会」の名義で刊行された『三峡論証準備工作簡報』の第二号には、「会議は一二月下旬に予定されていたが、葛洲壩ダムの堰き止め期間と重なっており、こちらに

精力を注いで集中したいという銭正英と林一山同志の建議により、会議の開催時期を来年の前半に延期する」とあった。<sup>(30)</sup>このことから、この会議が三峡ダムを推進する中心的人物である水利部長銭正英と長弁主任林一山の提案により延期されたことは明らかである。

この報告を通して二人が行った提案の背景には、葛洲壩ダムの堰き止め日程との関係以上に、以下のような水利部門としての思惑があったものと推測される。

第一に、この論証委員会の議題の設定は推進派にとって不利なものであった。前述したように、論証会の核心となる問題は、「三峡ダムをやるかどうか、やるならいつやるか」であり、この議題設定自体に、三峡ダム計画を初めから仕切りなおす意図が感じられよう。また、具体的な課題についても、一番に据えられているのは「三峡ダム建設の経済効果と現れる可能性のある問題」であり、水利部門にとっての重要事項である「三峡ダム建設を通した長江中下流の洪水対策」の優先順位が低い。このことから、この論証会では三峡ダム建設の決定を中央に促す可能性は低いと判断したものと思われる。

第二に、会の構成メンバーにも水利部門にとって不利な要素があった。というのも、この論証会を主宰する科委会の林漢雄は、李鵬らと同様「留ソ組」（共産党内最高指導部の子弟で四八年からソ連に留学し、五〇年代半ばに中国に戻ってきたグループを指す）であったが、李銳のすすめにより水電部門でキャリアをスタートし、葛洲壩ダムの政策過程にもかかわった。林漢雄が水電部門の人間であり、かつ李銳と親しいことに鑑みれば、三峡ダムにたいして積極的な立場をとるとは考えにくい。

また、李銳が職場復帰したのちに発出した電力工業部の七九年第一号文件は、三峡ダムについてのものであった。<sup>(31)</sup>同時に李銳は能源委員会の副主任を兼任しており、最高指導層で発言できる立場にあり、銭正英と林一山よりも大きな権限を有していたと思われる。<sup>(32)</sup>水利部門にとって、李銳の存在は彼らの論証委員会における立場を弱

めるものと警戒するに足らう。

### 第三節 水利部門の「低壩」志向——治水から発電への傾斜

#### 1 銭正英「一二八メートル案」の指示

じつは銭正英も八一年一月に葛洲壩ダムの堰き止めセレモニーに参加しており、同月一六日に、現場で魏廷璋らから「三峽水利枢紐論証委員会」の準備情況について報告を受け、さまざまなこと(33)を指示した。

銭正英は、「最高指導層と水電部門をはじめとする各方面を納得させられるように、また、(三峽ダムを支持する)領導同志が『軍令状』を出すときに自信が持てるように、必要な資金を粉飾せず算出し、三峽ダムは水没の損失よりも得られる利益が大きいことを明確にすること。または発電費から立ち退きの資金を捻出する方法の検討」などを指示した。

そのうえ銭正英は、「規模が大きくない『分期開発』の『低壩』案を論証会に提出するように」と長弁に指示した。「この案は現実的である。それによって論争になつていく多くの問題を脇にやることができる」というのがその理由である。

つまり、「立ち退き住民が大幅に減り、貯水位が低いためミサイル攻撃の懸念も弱まる。同時に発電の利益と治水の便益は得られる。そして、葛洲壩ダムの設備、基地も再利用できる。結果的にほかのダムを造るより、かえって準備作業と施工期間が短くなる」との考えである。

二月二日に、長弁は宜昌で銭正英に対して、「三峽(三鬮坪)枢紐分期開発初期貯水位一二八米方案(壩頂高一四五米)簡述」を報告した。この一二八メートル案の目的は、「三峽ダムの初期投資と立ち退き住民の数を減ら

し、早いうちにダムの役割を発揮することである」とし、具体的に、「初期の立ち退き住民は二〇万人、発電能力六〇〇万キロワットであるが、以後ダムの高さを継続して増やし、治水能力を高めると同時に発電と水運による収益も向上させる」というものである。<sup>34</sup>

この案は長弁が六〇年代に検討した「分期開発」の案にもとづき作成したのだが、ダムの高さは一四五メートル、最終的な貯水位が一九〇から二〇〇メートルになっている。<sup>35</sup>

この初期貯水位一二八メートル案は、水利部門が従来求めてきた長江中下流の治水の役割がほとんど果たせず、発電規模もそれほど期待できないものである。ここにおいて、水利部門のなりふり構わぬ姿勢が浮き彫りになったといえよう。

じつは、錢正英と林一山は「八一年前半に論証会を再開」することを提案していたが、「開催がうやむやになった」。その背景を、「水電部門は葛洲壩ダムの六月の水運開始、七月の発電開始に専念したため論証会に構っていらなかった」とされている。<sup>36</sup>しかし、後述するように、洪水対策にならない一二八メートル案は、「高壩」をめざす王任重らの賛同を得られなかったものと考えられる。結局、論証会が開催されずにこの案も検討されな  
いままうやむやになってしまった。

## 2 長弁「低壩」模索の歴史

### ① 発電優先の「分期開発」案

じつは、長弁はそれまでも三峡ダムの貯水位に関していろいろな案を提起し中央に政策決定を促してきた。

長弁が長江中下流の水害の根本的な解決をめざし、ソ連人専門家の指導下で考案したのは二〇〇メートルを超える大型ダムであった。成都会議において、四川省の水没の損失を勘案し、ダムの正常貯水位は二〇〇メートル

以下に据えることが決められたのを受けて、五九年に長弁が編制した「長江三峽水利樞紐初步設計要点報告」でも二〇〇メートル案が決定されている。<sup>(37)</sup>

しかし六〇年から三峽ダム計画そのものが停滞すると、長弁は六四年頃から中央に対して安全保障、資金と水没の面において着手しやすい「分期開発」案をアピールし、政策決定を促した。

「分期開発」案とは、まずは少ない投資額で規模の小さいダムを造り、のちに治水の必要性に応じ数段階に分けて徐々にダムの本体の高さを増やしていくというやり方である。そして、その目的が治水から離れ、あくまでも三峽ダムの発電機能を優先させていることに注目すべきである。

入手が叶った資料では、長弁は七一年までの間に繰り返し四回にわたって、洪水対策ではなく発電を第一の目的とした「分期開発」案を提案したことがわかっている。

(1) 六四年四月三日周恩来への提案

長弁がはじめて「分期開発」案を提案したのは、六四年四月三日、周恩来に対してであった。<sup>(38)</sup> 具体的な内容は次の通りである。

「第一期（初期）のダムの正常貯水位を一一五メートルにし、主な役割を発電とする。第二期は堤高を一六二メートルまで高め、正常貯水位を一五〇メートルにする。主な役割は洪水対策と発電である。第三期は、正常貯水位を二〇〇メートルに高める」。

また、「七一年から七三年までに正式に着工する。七七年から八〇年までに第一期工程を完成させ、七六年から七七年までに発電を開始する。それ以降は必要に応じて徐々に（ダムを）高くしていく」予定であった。

このように、最終形態として正常貯水位二〇〇メートルが構想されているが、第二期以降をいつ実現させるか

については明言を避けている。

(2) 六六年三月九日「党中央と主席」への提案

第二回目は、文化大革命運動（以下、文革）が勃発する直前の六六年三月九日である。林一山は再度「党中央と主席」宛てに「關於長江三峡工程設計問題的報告」を出した<sup>(39)</sup>。

この報告も三峡ダムの発電機能を重視した「分期開発」案である。具体的に、第一期の目的は、発電と水運であるとし、正常貯水位を一一五メートル、ダムの高さを一二四メートルとした。第二期の目的は、ある程度洪水対策の需要に応じつつ、引き続き発電と水運の効率を高めることとした。堤高を一六二メートルに上げ、発電のために貯水位を一五〇メートルまで引き上げる。第三期は、堤高を最終段階まで高めるが、水没の損失減少を念頭に、最終貯水位を二〇〇メートルから一九〇メートルに下げることを検討する。

また、「六八年に施工の準備を開始し、六九年に着工、七五年に発電開始する」というスケジュールで、「三峡ダムを第三次と第四次五か年計画の間の建設プロジェクトとすること」を求めた。

この報告では、「積極準備、充分可靠」に加えて、同じく毛沢東の三峡ダムへの指示であった「有利無弊」という方針を付け加えて、「分期開発」のメリットを強調した。

林一山は、「三峡ダムの莫大な発電量が足かせになっていたが、『分期開発』ならば発電量が抑えられるメリットがある。また、『分期開発』は、国家の資金の合理的な利用に有利であり、同時に三峡ダムの安全保障にも有利である」とアピールした。

いいかえれば、「分期開発」は、当時の社会状況では消費しきれない発電量、資金難と安全保障への懸念という問題をすべてクリアできる案である。しかしそれにより、長弁自身が強く唱えた三峡ダムの治水の役割が相対

化されたことも否めない。

報告はこの問題を意識してか、次のようにつづけた。「三峡ダムのグラントデザインの原則は、総合的な利用、合理的に洪水対策、発電と水運を塩梅よく運用し、水利資源を充分に利用し、害を取り除き、利を興し、その他の洪水対策と組み合わせ、徐々に長江を根治する目的を達成する」ことであり、また、「三峡ダムは、長江中下流とりわけ荆江河段の洪水対策にとつて巨大な役割を果たせるが、しかしすべての問題を完全に解決することはできない」とした。

このように長弁は、従来の「三峡ダムによって根本的に長江の洪水問題を解決する」との主張から後退したことが明らかである。

(3) 六八年四月湖北省との連名で「毛主席、党中央、国务院、中央军委」への提案

第三回目は、六八年四月のことである。長弁は湖北省長張体学らとともに三峡ダムサイト候補地を实地調査し、銭正英らに三峡ダムの研究状況を報告した。張体学と銭正英の同意を得て、水電部と湖北省が連名で「毛主席、党中央、国务院、中央军委」に対して「關於修建三峡水利樞紐的設想」の報告を出した。<sup>(40)</sup> そのなかで、三峡ダムを二期に分けて建設することが提案された。

第一期は、主に荆江地区の洪水被害と湖北省、河南省、湖南省西部と四川省東部の電力不足問題の解決、および川江（四川省域内を流れる長江のこと）のもつとも通航困難な峡谷地帯の水路の改善を目的とし、貯水位を一五〇メートル前後、堤高を一六〇メートル前後とした。第二期は最終規模まで建設する。

この案は、二期仕立てが特徴であり、初期貯水位を一五〇メートルとしているが、最終的な貯水位は提示されていない。この提案は翌年六月に毛沢東から戦争への懸念という理由で門前払いされ、葛洲壩ダムの建設が決定

された<sup>(41)</sup>。当時張体学と銭正英は逼迫する湖北省の電力不足の問題を解決するために三峡ダムの建設を求めていた。にもかかわらず、この案では洪水対策を一番の目的として挙げている。

(4) 七〇年一月一七日の周恩来への提案

第四回目は、七〇年末に葛洲壩ダムが最高指導層において検討される過程で行われた。当時、政治運動から辛うじて職場復帰した林一山はその建設に反対していた。その理由は、三峡ダムの補完ダムとして考案した下流の葛洲壩ダムを先に建設した場合、上流の水位が二〇メートルも上昇し、三峡ダムの工事に支障をきたすというものであった。そのため、彼は周恩来の指示にしたがい、七〇年一月一七日にこの二つのダムを比較した報告を出した<sup>(42)</sup>。

この報告において、発電と水運は三峡ダムの第一義の目的として強調されている。林一山は、長弁が三峡ダムの「分期開発」について大量の研究を行ってきたことをアピールし、第一期の正常貯水位一一五メートル案の規模、発電量と投資額などは葛洲壩ダムと遜色がないとして、三峡ダムを先に建設することを強く主張した。

総じていえば、長弁による一連の「分期開発」に関する提案は、三峡ダムの第一義の目的として主張された洪水対策よりも発電を優先させたものであり、時勢に合わせて三峡ダムの着工の機会を狙っていたことがわかる。また、「低壩」を主張したがゆえに、三峡ダムの治水能力が確保できず、従来「三峡ダムによる洪水の根治」という目標から、ほかの治水事業との組み合わせによる洪水の根治へと主張が変化している。

② 李先念の「高壩中用」案への追隨

このように、林一山の率いる長弁は、葛洲壩ダムが着工される頃まで、「分期開発」の提案をつづけた。別稿



で詳述したように、林一山は葛洲壩ダムが設計の失敗により二年もの工事停止を余儀なくされた際に、その再設計を周恩来から任された。そして、葛洲壩ダムの工事再開を機に、林一山は三峡ダムを政策過程に組み入れようと試みた。<sup>(43)</sup> 長弁は、三峡ダムの安全保障への懸念をかわすために、「太平溪」をダムサイト候補地として推していた。他方、林一山はダムの正常貯水位について、李先念が七八年一月に葛洲壩ダムを視察した際に提案した「高壩中用」案に追随するようになった。<sup>(44)</sup>

同年一月二六日、林一山が李先念と國務院宛てに「關於三峡水庫移民問題的報告」を提出した。<sup>(45)</sup> この報告では林一山は、「高壩中用、分期移民」を提案した。

「高壩中用」案とは、あらかじめ高い治水能力が確保できる一定高度（二二〇メートル以下）のダムの本体を建設し、段階的に貯水するという構想である。

この案のデメリットとして、その「一定高度」以下の地域（主に四川省内）は、いつになるかわからない立ち退き期日のため、きわめて不安定かつ不利な状態に置かれることが挙げられる。

前述したように、林一山の率いる長弁は、六〇年代から「分期開発」案を一貫して提案してきた。これは、発電のメリットを享受しつつ投資額を抑えることが可能であり、かつ立ち退きの規模も小さくなることから、政策決定者には受け入れやすい提案であったと思われる。しかし、三峡ダムは初期工程の低い貯水位では十分な治水能力を持たず、かつその後ダムを高くできる保証はない。そのため、「分期開発」案では長江中下流の「千年に一度の洪水を防ぐ」という林一山らの初志を叶えることはむずかしい。

これに対して、「高壩中用」案は林一山の「分期開発」案と比べて、洪水対策を視野に入れたものであり、初めから「一定高度」のダムを造ることができる。しかしこの案は、湖北省をはじめ長江中下流を洪水から守るメリットがあるものの、四川省域内の水没地域にとっては明らかに非常に厄介な代物である。

にもかかわらず、林一山が「高壩中用」案に追隨したのは、その治水能力もさることながら、「三峡ダム」とは主に李先念同志が主導権を持っていた」との認識から、七〇年代末の李先念の権力に便乗して三峡ダムの決定を促そうという思惑があったものと思われる。<sup>(46)</sup>

### 3 魏廷琿と王家柱による「一五一メートル案」の提案

じつは、長弁は八一年一月に、前述した論証委員会のために作成した報告をたたき台に、補足の研究を行い「長江三峡水利枢纽论证报告」を正式に完成した。<sup>(47)</sup>

この報告の内容は不明であるが、しかし翌月に、魏廷琿と王家柱の連名による「關於興建水利枢纽加快我国能源建設的意見」という報告（以下、「魏・王報告」）が出されている。<sup>(48)</sup>

この報告はタイトルからして、三峡ダムの発電機能が前面に打ち出されている。その内容も、「エネルギー不足問題の解決を優先して考慮し、三峡ダムを分期して建設し、その貯水位を最大でも一五一メートルに抑えることを提案する」というものである。

具体的には、「二〇年に一度の洪水を前提に、ダムの水位は一五一メートルを超えないようにし、堤高を一七〇メートル程度まで造る。『高壩中用』の手法をとり、百年に一度の洪水の際に、貯水位は一六〇メートルを超えないようにする」とのことである。また、大型洪水時のみ臨時に発生する一〇メートル分の水没地域に対しては、発電の収益から補償資金を捻出するという構想である。

「この案では、一一九〇万キロワットの発電量が得られるが、それは石炭三五〇〇万トンの発電量に相当する。着工から第一期の発電機二台による発電の開始まで、工期は約九年で、投資額は六三・六億元（ダム水没費用は含まない）になる。一五一メートルの貯水位による立ち退き住民は三九万人（うち農村人口が一四・二万人）、水没

耕地は一二万畝である」とメリットを強調している。

また、報告は、「国民経済の発展に応じた需要と立ち退き住民の配置情況に鑑み、適当な時期にダムを高めていき最終段階まで建設し、同時に貯水位を高める」と述べ、発電というニーズに合わせて一五一メートル案を提案した。

このように、この報告は、一五一メートル案を構想し、そのメリットを随所で強調しているが、三峡ダムが最終的にどれぐらいの高さになるかについては明言を避けている。というのも文中、「三峡ダムは、二〇〇メートル正常貯水位方案の場合、立ち退き費用を除いた総投資額は一一三・五億元になる。この数字は、繰り返し計算しかつ余地を残している」と唐突な一文が登場するが、「二〇〇メートル」という文言が記されるのはこの一か所のみである。最終貯水位をあいまいにしていることは、三峡ダム建設のハードルを低く見せるための魏廷璋ら長弁の「戦術」であったのかもしれない。同時に、彼らの苦衷もうかがえよう。

#### 第四節 水利部門の「高壩」への回帰

##### 1 王任重の治水重視と「二〇〇メートル案」の強調

既刊の著述は、八二年初めに三峡ダムの動態について、おおよそ次のように述べている。「錢正英は鄧小平の『三峡ダムは近いうち国家計画に組み入れる予定がある』との指示を伝達し、長弁に補足の報告の提出を指示した。<sup>(49)</sup> それを受けて、長弁は二月に、中央、國務院と湖北省に『關於興建三峡水利樞紐的補充報告』（以下、「補充報告」）を提出した。また、湖北省党委員会、人民政府も長弁の『補充報告』を検討し、中央と國務院に『關於興建長江三峡水利樞紐的報告』を出した」。

しかし、長弁によるこの「補充報告」は「高壩中用」を踏襲しており、約二か月前の「魏・王報告」で提案された一五メートル案が、なぜ二〇〇メートル案に戻ったのかは明らかではない。

長弁所蔵の档案資料では、二〇〇メートル案に戻った経緯の一部始終について詳細な記録が残っており、王任重の強い影響力および主管部門や地方政府の関係を明らかにしている。<sup>(50)</sup>

八二年一月二十九日、王任重は武漢東湖（毛沢東もよく滞在した療養地）で長弁副主任魏廷琿から三峡ダムに関する報告を受けたが、この際、湖北省委副秘書長呂乃強、弁公庁副主任申興国、および国家農委副主任楊坤泉も同席した。

この集まりの目的は、主に中央に出す「補充報告」をいかに書くかを討論することであったが、王任重は報告を受けながら、いくつかの重要な指示を行った。

第一に、三峡ダム正常貯水位の問題である。王任重は前回の報告（「魏・王報告」を指すと思われる）では中間の貯水位にしか言及しておらず、最終規模は明示していないことを指摘した。魏廷琿は、「今回の長弁の報告は一九〇メートルを最終規模にした。二〇〇メートル案に比べて水没を軽減することができ、また成都と重慶間の鉄道（成渝鉄道）も小規模の線路変更で済む。錢正英も一九〇メートル案に賛成した」と報告した。<sup>(51)</sup>

それに対して、王任重は「この案は考慮してもよい。しかし二〇〇メートル案も準備しておくように。余地を残す必要がある。二〇〇メートル案を留保しておけば、将来的に高くすることができる。考えが変われば、高くすることができる。（中略）。基礎は二〇〇メートル案でやる必要がある。いつ高くするかは、中央が国情と人力、物資と財力をもとに決定する。九〇年以降、国家の状況はきつと目下とは異なる」と二〇〇メートル案を強調し指示した。

王任重は、「報告書を作成する際に、洪水対策を一番に掲げないといけない。そこは（発電を強調するという動

きに) 迎合してはならない。五四年毛主席が三峡ダムをやる<sup>32</sup>と決心したのはまさに洪水問題を解決するためだと強調した。彼の「高壩」志向は治水によることが明らかである。

第二に、投資問題に関して、王任重は「投資額を正確に見積もり、『上馬予算』を避けること」を求めた。この「上馬予算」というのは、上級部門からプロジェクトの許可を得やすくするために、投資額を低く見積もることを指す言葉である。当時しばしば行われたやり方で、このようなプロジェクトは「釣魚工程」と揶揄されることもある。

じつは、八一年一月にも銭正英は長弁に対して同じ忠告を行っている。これらを考え合わせると、これは当時の最高指導層が下級組織に対して嚴重注意する事項のひとつであったことがうかがえる。

第三に、三峡ダムの安全保障の問題である。王任重は、「(ダム) 安全保障は考慮しなくてもよい。原子爆弾を恐れては、何もかも建設ができなくなる。ダムが爆撃されるのを恐れるなら、都市の建設はどうするのか? 北京、上海はどうするのか? もう建設しないのか?」と鄧小平の発言を伝えた。

別稿で詳述したように、三峡ダムの安全保障問題は、七九年一月に水利部党組がダムサイト候補地を三關坪に決定したことで解決済みであったはずである。しかしこのように最高指導層が言及するからには、この問題は依然としてくすぶっていたように思われる。そして、鄧小平のダムの安全保障に関する楽観的な考え方は、八〇年代における三峡ダムの政策決定に大きく影響したものと推察される。

最後に、王任重は長弁のみならず、湖北省の幹部にたいしても、「報告書は水利部だけに頼ってはだめだ。(湖北) 省委が大きな役割を果たさないといけない」と報告書の作成と提出を求めた。後述する長弁と湖北省の報告は、まさにこの王任重の指示によって生まれたものである。

## 2 長弁の「二〇〇メートル案」報告

長弁は王任重の指示にしたがって数日後の八二年二月二日に、「關於興建三峽水利樞紐的補充報告」を國務院に提出した。そのなかで、錢正英も同意した一九〇メートル案が撤回され、二〇〇メートル案が提案された。

「補充報告」は、「われわれは最終規模の貯水位を二〇〇メートルとする案を選択することが比較的合理的である」と考える。また、投資の集中を避け、とくに立ち退きの負担を軽減するために、ダムと発電所は一気に最終規模まで建設し、貯水位は数段階に分けて高める方式で運用する」とした。<sup>(53)</sup>

「補充報告」の左記の点がとりわけ重要であると考えられる。

第一に、この提案は実質「高壩中用」案であり、ダムの運用はおおまかには次の通りである。

第一期は、一五一メートルで運用し、年に約四五〇億〜七二〇億ワットの発電量を得る。五四年型洪水が発生した場合、ダムの貯水位は一五七メートルを超えないように運用し、それにより、荊江地域の貯水池（原語…分洪区）への分流は不要になる。立ち退き住民は三六万人、水没する耕地は一二万畝である。

第二期の運用水位は一九〇メートルであり、治水能力が最終規模に近づくほか、年間発電量は約九〇〇億ワット超、立ち退き住民の累計は一〇七万人になり、水没耕地は三六万畝増え、累計四八万畝になる。

第三期は、最終貯水位二〇〇メートルで運用する。立ち退き住民が三〇万人増加し、累計一三七万人になり、水没耕地は二〇万畝増加し、累計六八万畝になる。

この一連の数字は、最高指導層による政策決定時の判断材料となるものである。とりわけ、立ち退き住民の数は、正常貯水位が一五一メートルから二〇〇メートルに引き上げられた場合には約一〇〇万人も増えることが一目瞭然で、大きなインパクトを与えるものであったといえる。

また、第二期から三期にかけて上昇する貯水位はわずか一〇メートルだが、立ち退き住民は三〇万人も増加す

る。これほどの影響にもかかわらず、この案が王任重の一存で決定し、提案されたことは特筆に値しよう。

第二に、三峡ダム建設のスケジュールに関して、「八三年に施工の準備を開始し、八六年に正式に着工する」と提案された。八六年の着工時には「葛洲壩ダムの土建部分の施工は基本完了しており、その労働力と機材設備は適当な補充と調整を経て、三峡ダム施工の需要を満たすことができる」と述べ、葛洲壩ダムの労働力と機材設備に期待していたことが明らかである。

第三に、建設資金に関して、三峡ダムの投資総額は一六七・五三億元であり、「以電養電」により資金を捻出するとして、「葛洲壩ダムの発電収入を三峡ダム投資時の主要な資金源にし、不足部分は銀行の貸付金で賄う」ことが提案された。

### 3 湖北省の報告と利益主張

前述した王任重の指示を受けた湖北省党委員会と人民政府は、長弁の報告を検討し、同月一〇日に党中央と國務院に対して「關於興建長江三峡水利樞紐的報告」を提出した。<sup>(54)</sup>

この報告は、「三峡ダムを近期の国家計画に組み入れる予定」との鄧小平の指示を擁護すると表明する一方で、報告の提出に際して王任重の指示にしたがったことを伏せている。

また、湖北省の立場から、主に二つの点において自らの權益を主張している。

ひとつは、二〇〇メートル案をアピールしたことで、これは三峡ダムの治水の役割を強調し荊江堤防と武漢市を保護する目的である。

報告では、五四年洪水によって三万人あまりの死者があったことを例に挙げ、同規模の洪水が発生した場合、損失はさらに拡大するとした。<sup>(55)</sup>そこで、三峡ダムは、長江中下流の洪水問題を根本的に解決する鍵となるプロ

ジェクトであるとし、武漢市より上流から来る洪水の三分の二程度をコントロールでき、貯水位が二〇〇メートルに達した場合は、たとえ歴史に残る一八七〇年型の洪水が来ても、荊江堤防と武漢市の安全を守ることができるとの認識を示した。

いまひとつは、三峡ダムの着工決定に時間がかかる場合、葛洲壩ダムの労働者が手持ちの状態を回避する策として、湖北省に新たなダムを建設することを求めた点である。

報告では、三峡ダム建設が今日まで決定されなかったのは財力の問題であるとしたうえで、長弁の提案する貯水位を分期して高める案は、比較的現実に即しており国力に適しているとした。また、葛洲壩ダムの発電収益を三峡ダムの主要な投資原資にするとの長弁の提案に賛同を表明した。

そして、長弁は三〇〇〇人を超える技術者がおり、三〇年近く積み上げたノウハウもあることに加え、(葛洲壩ダムの工事を担当する)三三〇工程局は、施工労働力が五万人超、施工機材や設備も五億元の価値を有しており、比較的条件のよい後方基地もある。葛洲壩ダムの土建工事は八六年に基本的に終了するため、三峡ダムと連続させることができる。開削や埋め立ての施工機材と労働力は、八三年には三峡ダムの施工現場に移動させて準備工事に取りかかるとできるとした。

そのうえで、もし葛洲壩ダムの完工後、間を置かず三峡ダムに着手することができない場合、長弁と三三〇工程局の人材流失、移転、操業停止や手持ちが発生する可能性があり、いざ着工の際には大きな損失になるだろうと強調した。そして、長弁と検討した結果、三峡ダムの建設までに間が空くようであれば、(湖北省内にある)清河の隔河岩ダムを建設することで、葛洲壩ダムの労働力を充分に活用できると同時に、完全に手持ちをなくすことができ、経済的な効率を上げることができる。したがって、中央に隔河岩ダムの建設について考慮するように提案する、と結んだ。



この報告に対して、同月一日に副総理万里は「計画委員会が検討するように」と指示した。<sup>(56)</sup>

おわりに

本稿は、一九八〇年代初頭までの推進派内部とりわけ水利部門における三峽ダムの正常貯水位をめぐる揺れと模索を分析し、三峽ダム史における治水から発電へのパラダイム転換の伏線と政策形成の特徴を解明した。

第一に、水利部門が三峽ダムの建設決定そのものを目指すあまりに発電機能を強調せざるを得ない状況のなかで、治水という役割を相対化させてしまったことがひとつの伏線となった。

推進派が三峽ダムの建設決定を目指して提案したいくつかの「低壩」案、および「分期建設」と「高壩中用」の案は、資金調達、電力の需要と四川省の水没の軽減などの問題をクリアするためのものであった。「分期建設」も「高壩中用」も、まずは低いダムを造り、それを「誘い水」にして時機を見計らい二〇〇メートル案に近づかせるという、推進派とりわけ水利部門の戦略的な知恵であり、ある種の「迂回作戦」といったものであるといえよう。八〇年代初頭において三峽ダムの水力発電の役割が期待されたなかで、水利部門による一二八メートル案や一五一メートル案という「低壩」案の提案においてもそのような意図がはっきりしているといえよう。

三峽ダムの正常貯水位をめぐる六〇年代から八〇年代初頭までの推進派内部において見られた揺れと模索は、ある意味で、水利部門が三峽ダムの決定そのものを目指すあまりにその発電機能を強調せざるを得ない状況のなかで、治水という役割の相対化を引き起こしてしまった要素を孕んでいた。それは三峽ダムの主たる役割が治水から発電へのパラダイム転換をもたらすひとつの契機となり、のちに水力発電部門に主導権をゆずる伏線になったものと考えられる。

第二に、官僚組織のヒエラルキーのなかにあって、委員会は下部組織の非協力に合えば、政策を遂行できない状態に陥ることがある。

八〇年七月に鄧小平が「三峡ダムを軽率に否定してはいけない」と示唆したのを受けて、国務院は科委会と建委会の主宰による「三峡水利枢纽论证委员会」の開催を決定し、政策が動き出したかに見えた。ところが、同年一二月下旬に予定された会議は錢正英と林一山の提案により延期され、最終的に立ち消えになった。この時点における鄧小平の影響力の限界がうかがえるものであるが、同時に官僚組織のヒエラルキーにもかかわらず、主管部門は上級組織である委員会の決定をサポート・ジュすることがあり、政策決定の「断片化」の好例であるといえる。

第三に、長江中下流の洪水対策を最優先に捉える推進派王任重は水利部門の「低壩」の動きを牽制して二〇〇メートル案を強調し、水利部門と湖北省に「高壩」の提案を促した。政策の「断片化」をもたらすのは、先行研究で指摘されたような官僚組織間の軋轢もさることながら、政策の担い手である主管部門と同じ政策指向を持つ最高指導層との間の意見の不一致がより決定的な要因であると思われる。主管部門と同じ政策指向を持つ最高指導層との間に合意があったときに、政策が動き出すというメカニズムについての説明は別稿にゆずりたい。

〈付記〉 本研究は、二〇二一年度慶應義塾学事振興資金の援助を受けた。ここに記して感謝の意を表したい。

(1) 拙稿、「三峡ダム史におけるダム安全保障のパラダイム転換——一九七九年三峡ダムサイトの決定をめぐる——」『法学研究』第九四巻第五号、二〇二二年五月。本稿では、推進派は最高指導層の李先念や王任重、水利部門と湖北省を指す。

- (2) 「中共中央関於三峡水利枢纽和長江流域規画的意見（一九五八年三月二五日程會議通過、四月五日政治局會議批准）」陳夕総主編『中国共産党与三峡工程』六三～六四頁、中共党史出版社、二〇一四年。
- (3) Kenneth G. Lieberthal and Michel Oksenberg, *Policy Making in China: Leaders, Structures, and Processes*, Princeton University Press, 1988, pp.269-338. または、「綜述：三峡工程の決策与建設」陳夕総主編『中国共産党と三峡工程』三～三〇頁。武非「三峡工程決策研究」中央党校（国家行政学院）博士学位論文、二〇一九年。
- (4) 同右、Kenneth G. Lieberthal and Michel Oksenberg, *Policy Making in China: Leaders, Structures, and Processes*, Princeton University Press, 1988.
- (5) 中共中央文献研究室編『鄧小平年譜（一九七五～一九七七年）』上、六五四頁、中央文献出版社、二〇〇四年。
- (6) 「鄧小平副主席視察葛洲壩工程時的談話（一九八〇年七月二日）」『中央領導同志对葛洲壩工程指示批示文件匯編』二四一～二四二頁、中共水電部長江葛洲壩工程局委員会弁公室、一九八二年二月、米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校東アジア図書館所蔵、二〇一〇年。「鄧小平副主席視察三峡、葛洲壩、丹江口的指示（追記整理）」（一九八〇年七月）」長江档案館蔵、档案号A〇五—〇二—〇二a—一四。出所：前掲、武非「三峡工程決策研究」八〇頁。
- または、「鄧小平視察三峡、葛洲壩、丹江口的談話（一九八〇年七月）」『中国共産党与三峡工程』一〇二～一〇五頁。この資料に「魏廷琿追記（一九八〇年七月二五日）」とあり、魏廷琿の記したメモになっているが、文中に随所「魏廷琿同志」という言葉が用いられており、本人の記したものであることを記しておく。
- (7) まさに長弁の総工程師洪慶余がまとめたように、三峡ダムは非の打ち所のないプロジェクトとの印象を与えることができた。
- すなわち、「長江の水運問題を心配していたが、運んでいるものが多くないことがわかった。水門は五〇〇〇トンの通行能力があり、心配はない。もうひとつは生態環境の変化の問題であったが、聞くところによると問題は大きくない。三峡ダムは治水には非常に効果がある。投資は九五億元、移民費用は四〇億元だ。六年半で発電でき、発電量は二〇〇万キロワットを超えるから非常に効率がよい」ということであった。
- 洪慶余「関於三峡工程論争の歴史回憶」湖北省政協文史資料委員会、宜昌市政協學習文史資料委員会編『三峡文史博

- 覧』六九頁、中国文史出版社、一九九七年。
- (8) 前掲、「鄧小平副主席視察三峡、葛洲壩、丹江口の指示（追記整理）（一九八〇年七月）」長江檔案館藏、檔案号 A〇五—〇二—〇二a—一二四。または、「鄧小平視察三峡、葛洲壩、丹江口の談話（一九八〇年七月）」『中国共産党与三峡工程』一〇三頁。
- (9) 同右、「鄧小平視察三峡、葛洲壩、丹江口の談話（一九八〇年七月）」『中国共産党与三峡工程』一〇四頁。
- (10) 前掲、「鄧小平副主席視察葛洲壩工程時的談話（一九八〇年七月二日）」『中央領導同志对葛洲壩工程指示批示文件滙編』二四一—二四二頁。
- (11) 前掲、「鄧小平年譜（一九七五—一九七七年）」上、六五七頁。
- (12) 『中国長江三峡工程歴史文献滙編（一九一八—四八年）」四頁、中国三峡出版社、二〇一〇年。前掲、武菲博士学位論文「三峡工程決策研究」八〇頁。
- (13) 魏廷琿は、「鄧小平が『低壩に賛成だ』と表明した」としているが、誤りである。この発言は八二年一月になされたものであることを次稿で詳述する。
- (14) 『李先念伝』編写組、鄂豫辺区革命史編輯部編『李先念年譜（一九七〇—七八年）」第六卷、一二三頁、中央文献出版社、二〇一一年。
- (15) 「李先念副主席谷牧副總理聽取葛洲壩工程匯報時的重要指示（一九七八年一月七日）」前掲、『中央領導同志对葛洲壩工程指示批示文件滙編』二〇一頁。
- (16) 「中共中央書記処書記、國務院副總理谷牧同志在聽取葛洲壩工程情況時的挿話和講話（一九八一年八月二〇日）」同右、『中央領導同志对葛洲壩工程指示批示文件滙編』二七八—二八四頁。
- (17) 「李先念副主席視察葛洲壩工程時的談話記錄（一九八一年一月六日）」同右、『中央領導同志对葛洲壩工程指示批示文件滙編』二八五—二九六頁。
- (18) 「趙紫陽總理在葛洲壩工地聽取大江截流匯報時的挿話和講話記錄」同右、『中央領導同志对葛洲壩工程指示批示文件滙編』二五九頁。
- (19) 同右、「趙紫陽總理在聽取葛洲壩截流匯報時的部分挿話」『中央領導同志对葛洲壩工程指示批示文件滙編』二六〇

～二六四頁。

じつは、魏廷琿は三峡ダムと最高指導者のかかわりに関して多くの回顧文を執筆しているが、このように趙紫陽との接点があったにもかかわらず、彼について触れたことは皆無に近い。趙紫陽が失脚した指導者であることに加え、彼の三峡ダムへの慎重な立場は推進派に歓迎されなかったのかもしれない。

(20) 中共三三〇工程局委員会弁公室整理「趙総理在聽完滙報後的講話（一九八一年一月九日）」前掲、『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』二六五～二六七頁。

(21) 前掲、「趙紫陽総理在聽取葛洲壩截流滙報時的一部分挿話」『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』二六〇～二六四頁。

(22) 全国政協経済建設組・長江流域綜合治理与三峡工程調查組「三峡工程的論証应做出快上与緩上兩種方案的比較（一九八六年七月二六日）」中国科学院成都図書館、中国科学院三峡工程科研領導小組弁公室編『長江三峡工程争鳴集（総論）』一〇三～一〇七頁、成都科技大学出版社、一九八七年。

(23) 「薄一波副総理臨行前對劉書田的講話（一九八一年一月二三日）」前掲、『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』二九七～二九九頁。

次の文献では、薄一波の視察が「二月四日」になっているのは誤植であると思われる。『長江水利委員会大事記（一九四九～一九八三年）』（生産技術類…第三冊第九篇「工程設計与建設」）三五頁、長江水利委員会档案館、一九九三年。

(24) 「中共中央政治局委員王震同志視察葛洲壩工程時的談話（一九八一年一月二六日）」前掲、『中央領導同志對葛洲壩工程指示批示文件滙編』三〇一～三〇七頁。

(25) この会議では、米国からの借款、省エネと三峡ダムなどの問題も討議された。前掲、『李先念年譜』第六卷、一〇〇頁。

(26) 前掲、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』（生産技術類…第三冊第九篇「工程設計与建設」）、三四頁。

(27) 同右、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』（生産技術類…第三冊第九篇「工程設計与建設」）、三五頁。

「大事記」『中国共産党与三峡工程』五二二頁。

- (28) 崔志豪「三峡工程論証工程の由来」『長江誌季刊』一九八八年第三期、一四頁。
- (29) 前掲、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』（生産技術類・第三冊第九篇「工程設計与建設」、三五頁。
- (30) 前掲、崔志豪「三峡工程論証工程の由来」『長江誌季刊』一九八八年第三期、一四、六〇頁。
- (31) 同右、崔志豪「三峡工程論証工程の由来」『長江誌季刊』一九八八年第三期、一一頁。
- (32) 李鵬は、胡耀邦主宰の中央書記処会議に出席した能源委員会副主任李銳が「水力発電への投資増加を求め、葛洲壩ダムの建設に異議を申し立てた」と八一年七月二四日付の日記に記している。李鵬著『衆志絵宏図―李鵬三峡日記』一五頁、中国三峡出版社、二〇〇三頁。
- (33) 「錢正英在葛洲壩工地聽取魏廷琿等五位同志匯報三峡論証會準備情報後的講話（一九八一年一月一六日）」、出所：前掲、武菲「三峡工程決策研究」八〇～八一頁。
- (34) 前掲、『長江水利委員会大事記（一九四九～八三年）』（生産技術類・第三冊第九篇「工程設計与建設」、三五頁。
- (35) 長江水利委員会編『三峡工程技術研究概論』四一頁、湖北科学技術出版社、一九九七年。
- (36) 前掲、崔志豪「三峡工程論証工程の由来」『長江誌季刊』一九八八年第三期、六〇頁。
- (37) 前掲、長江水利委員会編『三峡工程技術研究概論』七九頁。
- (38) 前掲、『長江水利委員会大事記一九四九～八三年』（生産技術類・第三冊第九篇「工程設計与建設」、二四頁。
- (39) 林一山「関於長江三峡工程設計問題的報告（中央、主席宛て）」楊世華主編『林一山治水文選』三六九～三七四頁、新華出版社、一九九二年。前掲、『中国共産党与三峡工程』七六～八〇頁。
- (40) 前掲、『長江水利委員会大事記一九四九～八三年』（生産技術類・第三冊第九篇「工程設計与建設」、二五頁。當時、林一山が文革の影響で失脚しており、この案は彼の主導ではなかった。
- (41) 拙稿、「中国文化大革命期における国家建設―葛洲壩ダムの決定過程と國務院業務組」『法学研究』第九一卷第六号、二〇一八年。
- (42) 「附：林一山写给周總理的信」前掲、『林一山治水文選』三九一～三九四頁。
- (43) 拙稿、「長江葛洲壩ダムの失敗と三峡ダム計画の再浮上―中国文化大革命期の国家建設における國務院業務組」『法学研究』第九三卷第三号、二〇二〇年三月。

- (44) 『中国三峡建設年鑑』編纂委員会編『中国三峡建設年鑑（一九九四年）』二六五頁、中国三峡出版社、一九九五年。または、前掲、『長江水利委員会大事記一九四九〜八三年』（生産技術類…第三冊第九篇「工程設計与建設」）、三一頁。
- 「李先念副主席、谷牧副総理視察葛洲壩工程時的重要指示（二）一九七八年一月六日」李先念副主席、谷牧副総理視察葛洲壩工程時的重要指示（二）一九七八年一月七日」前掲、『中央領導同志对葛洲壩工程指示批示文件滙編』一六九〜二〇五頁。最後の資料の二〇二〜二〇三頁が落丁のため、李先念の「高壩中用」についての言及が確認できない。
- (45) 「關於三峡水庫移民問題的報告（李副主席並國務院）」前掲、『林一山治水文選』三七五〜三八〇頁。前掲、拙稿「三峡ダム史におけるダム安全保障のパラダイム転換——一九七九年三峡ダムサイトの決定をめぐる」。『三峡ダム史におけるダム安全保障のパラダイム転換』一四三〜一四六頁。
- (46) 『林一山回顧録』三〇三頁、方志出版社、二〇〇四年。
- (47) 前掲、崔志豪「三峡工程論証工程的由来」『長江誌季刊』一九八八年第三期、六〇頁。
- (48) 魏廷琿、王家柱「關於興建三峡水利樞紐加快我国能源建設的意見（一九八〇年二月）」前掲、『中央領導同志对葛洲壩工程指示批示文件滙編』四三四〜四四六頁。
- この二人の名前の前に、「長江流域規画弁公室」（長弁の全称）と所属組織を明示していることから、この報告は、長弁が組織として出すことに同意したと考えてよいだろう。同時に、魏廷琿は当時長弁副主任の座にあった。
- 王家柱のこの時点の職位は不明であるが、八六年七月から長弁総工程師になった。中華人民共和国水利部弁公庁編『新中国水利（水電）系統組織沿革（一九四九〜二〇〇〇年）』八七頁、中国水利水电出版社、二〇〇三年。
- (49) 「湖北省委、湖北省人民政府關於興建長江三峡水利樞紐的報告（一九八二年二月一日）」一〇六頁。前掲、武菲「三峡工程決策研究」八一頁。
- 次の文献は「中央領導同志」としている。「三峡工程的決策与建設」、「大事記」前掲、陳夕主編『中国共產党与三峡工程』二二、五二二頁。
- (50) 前掲、「中央書記処書記主任重同志在聽取長弁副主任魏廷琿同志匯報三峡工程時的講話（一九八一年一月二九日）」長江檔案館藏、檔案号A〇五—〇二—〇二a—四八四—1。出所…前掲、武菲「三峡工程決策研究」八一〜八四頁。
- (51) じつは、建国初期に成渝鉄道の決定過程において、水電部門が三峡ダムによる水位の上昇による影響があると

て線路の変更を求めて交通部門と利害衝突した。それについて、鄧小平は三峡ダムの設計が一〇年内に完成しないことを理由に、鉄道の建設が先決であると主張し決定を押し切った。出所：「鄧小平与成渝鐵路」「炎黄春秋」二〇一六年八月号。

(52) 前掲、拙稿、「三峡ダム史におけるダム安全保障のパラダイム転換——一九七九年三峡ダムサイトの決定をめぐる」。

(53) 前掲、「大事記」陳夕編『中国共産党与三峡工程』五二二～五二三頁。前掲、『長江水利委員会大事記一九四九～八三年』（生産技術類・第三冊第九篇「工程設計与建設」、三六頁。前掲、武菲「三峡工程決策研究」八三頁。

(54) 全文は、陳夕編『中国共産党与三峡工程』に所収されている。「湖北省委、湖北省人民政府關於興建長江三峡水利樞紐的報告（一九八二年二月一〇日）」一〇六～一〇八頁。

(55) 一九五四年の長江流域の洪水による死者の数について、「約三万人」が定説のようであるが、その内実について王任重は、「当時洪水による死者はそれほどいなかったが、水が引いてから全省で約三万人が病死した」と認めている。出所：王任重「不建三峡工程荆江大堤難保安全（在『荆江大堤志』首発式上の講話）（一九九〇年四月一七日）」『長江誌季刊』一九九〇年第二期。

(56) 前掲、『長江水利委員会大事記一九四九～八三年』（生産技術類・第三冊第九篇「工程設計与建設」、三六頁。または前掲、「大事記」陳夕編『中国共産党与三峡工程』五二三頁。